

電子版市民プレス 第53号

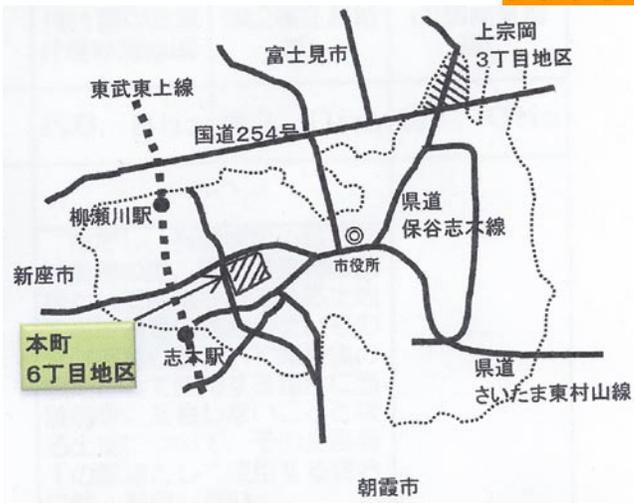
タブロイド地域紙「市民プレス」第53号（2017/15発行）の電子版として再編集しました。電子書籍専用のアプリケーション等でお読み下さい。またご利用の環境によっては、電子書籍の閲覧ができない場合がございます。

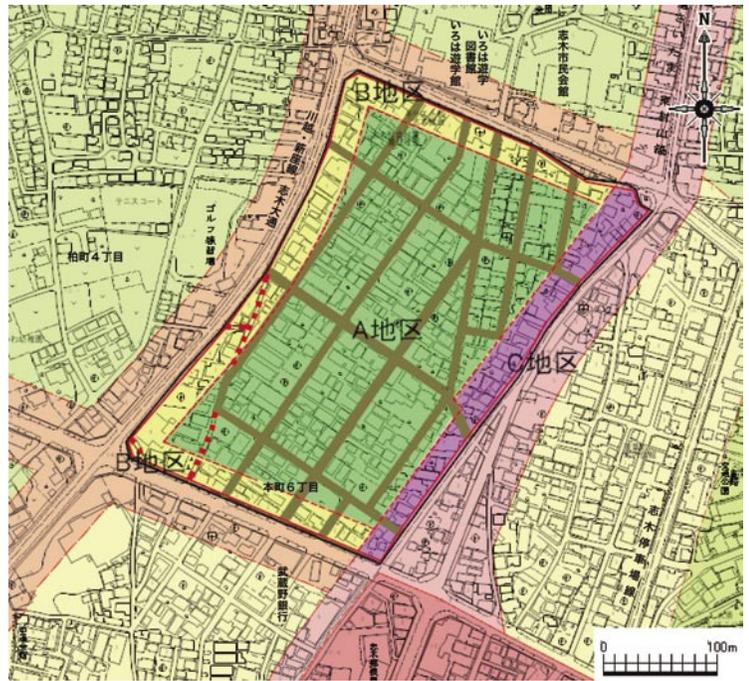
目次	
-PAGE 2	志木市本町六丁目の整備計画まとまる
-PAGE 5	河越館の歴史を緋く
-PAGE 14	歴史を緋く…志木町町立志木小学校の草創期
-PAGE 22	中宗岡の歴史を尋ねて
-PAGE 26	「スマートフォン」はもつと高性能に！

志木市本町六丁目の 整備計画まとまる

志木駅から歩いて、5、6分、志木小学校、市民会館に向かうまで、住宅エリアとして、良い環境を保ちたい、という住民の意向と、志木市のまちづくりの方針とが一つになって、新しい計画がスタートした。

志木市は、地区計画制度を導入して、すでに上宗岡三丁目地区の整備を完了したが、本計画はそれに次ぐもので、住民意識の盛り上りを捉え、公共事業としてルー化するモデルとなることが期待されている。

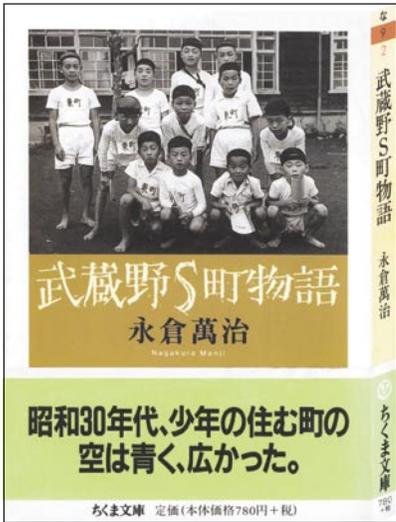




地域は、A地区（第一種中高層住居専用地域）、B地区（第二種住居地域）、C地区（近隣商業地域）の三つに区分され、建物の高さは、A地区で、10m、B・C地区で18mまでとなる。そのまわりを大通りが囲んでいるので、住宅からの外出には至便であり、静かな環境と住み易さを調和させた、まちづくりのモデルとなることが期待されている。

かつて、志木市に生まれ、作家として成功した永倉萬治の処女作「武蔵野S町物語」に記された、雲雀が鳴くのどかな地域でもあった。

目印は「志木小学校」で、そのころ、町で一番高い三階建ての建物だ。昼を告げるサイレンの音が、いまよりずっと遠くまで聞こえ、樺の大木が町のあちこちに聳え立っている以外は何もさえぎるものはなかった。胸いっぱい息を吸い込む彼の鼻を、花々の匂いと土くさい田舎の匂いが刺激したようだ。



河越館の歴史を繙く

河越館の在りし日の姿

埼玉県川越市の台地に館を築いた河越氏は、中世のころ、武蔵国きつての豪族として活動したが、その一族であった江戸氏は、入間川を下り、東京都千代田区、現在の皇居のあたりと推定されている台地に「江戸館」を築いたと伝えられている。

残念乍ら江戸館の遺構は皆無であるが、一方の「河越館」の跡地は、昭和四十六年から発掘調査が行なわれ、川越市は文化財調査ののち、中世の河越館の偉容を想像して鳥瞰

図として描いた。

川越市の北西に当る上うわど戸の入間川右岸に位置する約二町（218m）四方の規模の区画には、土塁・空堀などの遺構が現存しており、昭和五十九年、国の史跡に指定された。さらに平成二十一年十一月には史跡公園として公開され、訪れる人々は増加しつつある。

館跡周辺の景観

この図は、十四世紀中頃の館を推測したもので、①は幅



約4m、深さ約2mの堀で囲まれ、掘立柱建物②や井戸③、霊廟と推測される石葺きの塚④があつた区画、これを囲む道路⑤、その南側には出入り口として土橋⑥があつたと考えられている。

館の中心となる主屋は、遺構が集中する入間川寄りの場所⑦にあつたと推測される。道路を挟んで、区画①の西側には、堀で囲まれた宗教的な区画⑧、北側には堀で囲まれた区画⑨、そして南側には河越氏の持仏堂から発展した常楽寺⑩がある。現在は時宗の寺として存続している。

館の周辺に注目すると、東には水運で重要な役割を果たす入間川⑪が流れ、西に見える新しいまひえさんのうぐう日吉山王宮(現存)⑫の付近には、鎌倉街道⑬が通過して水陸交通の交わる要衝に立地していた。復元された河越館は、主屋・墓域・寺院など役割の異なる複数の区画によつて構成され、周囲を廻る道路や川などを通じて様々な人や物資、情報が集まり、周辺地域の中心となる都市的な場だつた。

このような歴史的・地理的背景が、河越氏の初代から二百年にわたる活動を支えたであろう。武士たちはここから各地に向かつて出陣し、京にもものぼつて戦つた。応安元年(1368)の戦いに敗れ、ついに河越氏が歴史の表舞台から姿を消した後も、寺域や戦闘の陣所として利用され続けることになつたのである。

河越館跡の歴史を繙く

川越市内の大字上戸地域は、入間川が北に流れる左岸に隣接し、高麗台地(入間台地)の先端部に当たっている。標高は二十米ほどだが、扇状地性台地の末端に位置しているため、北側の低地に向かつてゆるやかに傾斜している。

周辺一帯には古代から中世にかけての遺跡が知られ、「的場」地区には古墳群が所在する。また奈良時代には、武藏国入間郡の役所が設置されていたと推定され、そこに納める税(稲)を各地から運び込む要衝であつたことがわかり、時代を超えて地域がもつ役割の全体像が見えてきた。

的場古墳群

かつては三十基もの古墳があつたといわれるが、現存するのはその主墳とされる牛塚古



上戸 日枝神社(新日吉山王宮)



夕暮れ迫る 史跡公園

常楽寺 境内



墳のみとなった。

六世紀末ないし七世紀初頭に築かれたとき、全長47メートル、高さ4メートルの前方後円墳で、前方部が北、後円部が南を向いている。原形がすでに変形しているが、発掘調査の結果、後円部からは横穴式石室が見出された。崩れた築造当所の

石室の上にさらに石室が構築された重葬形式がみられる珍しい古墳で、盗掘を受けていたようだが、第一次棺床面からは金銅環、玉類、直刀（刀身に反りのない真っ直ぐな形のもの）、鉄鏃（石の鏃に代わって用いられるようになった鉄製のもの、狩猟に、または武器として使われ

た）。それを覆う第二次棺床面からは金銅環、金銅製指輪、直刀、刀子（現代の小型万能ナイフ）、玉類、馬具などが多数出土し、金銅指輪などの貴重な出土品は、川越市立博物館に展示されている。

牛塚という名称は、死んだ牛をこのあたりに多数埋めたことから名づけられたといわれる。東京・池袋から東武東上線で北西に約四十分、川越市駅のつぎの霞ヶ関駅で下車、南に歩いて約十分、JR川越線の線路沿いに所在している。

霞ヶ関遺跡

川越市上戸新町の入間川と小畔川に挟まれた地で発見された「霞ヶ関遺跡」は、発掘調査によって、大型の堀立柱建物跡と、区画的で造られたと考えられる溝や堀、柱跡等が確認され、建物群の溝と大型建物の柱穴から「入厨」の文字が書かれた、平安時代初期の墨書土器片が発見された。「入厨」の墨書土器や大型の堀立柱建物の规格的配置は、この遺跡の辺りに入間郡の役所に関連する施設が存在した可能性が示唆された。当時主要な情報伝達のための幹線となっていた「東山道武蔵路」が近くの西側を南北に縦貫していたとされていたので、この陸路と入間川などの水路による人と物資、そして情報が集まる交通

の要衝だったのでないか、と推測されている。ここから上戸・鯨井地区に向かって流れる人間川の水運を利用して、郡家の正倉に納める税としての稲が郡内各所から集められたと考えられる。

「鯨井」の由来……

徳川幕府によって編纂された『新編武蔵風土記稿』によれば、「鯨井村は郡（高麗郡）の東、人間郡の郡界にして三芳郷に属せり。往昔、久次郎なるもの草創して居しゆいに、久次郎居村と唱へしを、何時の頃からか、今の文字に書きかえしよし。或いは久志羅井、とも書きせり」とある。（『鯨井史』による）

河越荘がつくられたのは、室町時代の中頃、文明十八年（1486）に書かれた『廻国雜記』に、「常楽寺といへる時宗の道場」という記述があるが、この書は、聖護院門跡道興（1429～1501）が関東・北陸地方を旅したときの紀行文で、旅の途次に河越を訪れ、この寺が在ったことを明示している。

また後に徳川幕府が現地を調査して文政十一年（1828）に完成した『新編武蔵風土記稿』の高麗郡総説の項には、「川越城の畧跡は、日吉山王社の地であるか、常楽寺の地のあたりになるだろう」と記されていて、当時から、河越氏の居宅跡は、人間川沿いの上戸地区に現存する常楽寺の辺りと推測されていた。なおこの書の上戸村の項には、常楽寺付近の様子が挿絵（左図）として紹介されていたが、この度の調査で、当時の風光がまさしく蘇ったのである。

すでに述べたように、古代以後、奈良時代にも人と物資の交流する衝であったので、河越氏の祖先だった秩父一族が、地域の豪族として、ここを拠点としたことは頷ける。ただしこの地は、人間川と小畔川に挟まれた台地の端とはいえ、あまりにも要害性が認められない場所なので、その後城郭となり、河越氏を始め、続いて領主となった山内上杉氏・小田原北条氏（大尊寺氏）が、戦国時代末期まで重要視した理由は何だったのかについては明らかではない。

河越に拠点を置いた秩父氏の家系は、秩父武綱―重綱―重隆―能隆―重頼だが、重隆の頃、河越姓を名乗って、河越に館を構えたといわれている。



河越荘の総鎮守

平安時代に荘園を開発した地方豪族たちは、都への憧れと信仰心から、各地で寺社を次々に築いたが、平安時代末期の頃、河越能隆は河越荘園の総鎮守として、日枝神社を京都より分祀して領内の上戸に奉ったとされている。

ただし川越市上戸字山王315（東武東上線霞ヶ関駅の北、徒歩十分）に現存する日枝神社の縁起によれば、元日吉山王権現と称し、貞観年代（860）の創立という。休慶という修業僧が、京都比叡山麓にある日吉山王を深く信仰して、武蔵のこの地に社を建立したとされ、当時の資料として布目瓦などが出土している。永暦元年（1160）後白河法王が京都に新日吉山王社を祀ったさい、河越氏が河越庄を法皇に寄進、以後後白河法皇の御領地となって新日吉山王権現と称したといわれる。

河越荘の総鎮守として河越氏一族が崇敬した神社であった。河越氏の経重は、文応元年（1260）に銅鐘を寄進した。「武蔵国河越庄、新日吉山王宮・・」等の銘文があつて現存、重要文化財に指定され、現在は市内の養寿院に保存されている。この寺「養寿院」（現・川越市元町）は、河越経重が開基となって造営され、河越重頼（河越太郎）の墓も所在する。

以下次号につづく



志木町町立志木小学校の草創期

□明治七年以前 寺子屋時代

明治五年 学制発布

明治七年 宝幢寺を仮校舎とし、開校第一大学区第四番中学区第一九五番小学志木学校と称す。

□明治十二年 教育令時代

明治十七年 学区の名称廃止 志木小学校と改称

明治十九年 小学校令時代

明治廿三年 小学校令改正 義務年限四ヶ年となる。

明治廿三年 教育に関する勅語拝受

明治卅五年 高等科併置志木尋常高等小学校と改称 長勝院を仮分教場となす。

明治卅六年 新校舎竣工

明治卅八年 二月十一日 落成祝賀式

明治四十年 義務教育年限は六年となる。

以下、志木小学校の『開校百年記念誌』（昭和四十九年）から、そのあけぼのを探ってみよう。

徳川末期の寺子屋

一、宮原庄次郎師家

宮原庄次郎師は、天明六年八月十日館村に生れ、宮原家第十一代の主として、万延元年から安政七年まで卅六年間館村名主役を勤め、かたわら子弟の教導に当った。筆子（子弟）が建てた塚が宝幢寺境内の宮原家墓地にある。

二、宝居弘観師

宝幢寺住職で、文政三年生れ、明治十年に死亡した。明治七年七月志木学校開設後も、志木小学校の教師として勤務された。宝幢寺には、筆子が建立した立派な碑が残されている。寺子屋では、一般庶民を教育していたが、名家の子弟、名主とか、組頭とか、豪農商家の子弟が多く、女子はほとんど稀であった。

寺子屋教育はそれぞれの土地の名主とか、神官、僧侶とか、士族階級の一部の人達の手自由に委ねられ、教育内容も読み、書き（てならい）、そろばんが主で、進度に随つて、四書五経、といった漢字が授けられたが、所謂素読が中心だった。てならいは、千字

文、名頭、女庭訓、往来物、いろはなど、算法は、そろばんが主であった。

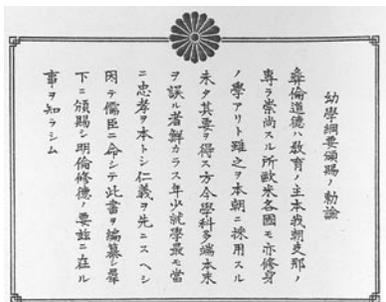
生徒は筆子とか筆生とか称し、入塾卒業もまちまちで年少者は六、七才から十五、六までが多かったようだ。

月謝（授業料）は、束脩そくしゅうといつて、中元、歳暮には多くは品物ですませた。米穀類、野菜、或は、自家製の餅とかうどんなど、様々で今から考えると、よくこれですんだものだと、当時の気風が偲ばれる。勿論、お金を持参するものもあつたが小額ですんだ。当時、五銭とか十銭とかいった額で束脩を持つて行くと、お師匠さんから、半紙とか筆とかをお返しにいただいでこれが、子供達にはなよりの楽しみであつたという。

修業年限は自由で、短いのでは半年から一年長い方でも五、六年で、女子は特に短かつたようだ。

学制が發布される

明治四年 七月 文部省設置／明治五年 八月 学制發布 太政官
布告／明治七年 七月 志木学校開設



明治十四年の勅諭
全国の師範学校に頒賜された



『太政官布告』

「人々自ら其の身を立て、その産を治め、その業を昌んにして、其の生を遂ぐる所以のものは他なし。身を修め智を開き才芸を長ずるは、学にあらざれば能わず。是学校の設けある所以にして、日用常行言語書算をはじめ、士官農商百工技芸及び法律政治天文医療に至るまで、凡そ人の営む所の事、学に非らざるば無し。人よく其の才のある所に応じ勉勵して之に従事し、然して後初めて生を治め産を起し業を昌にするを得べし。されば学問は、身を立つるの基本とも云うべきものにして、人たるもの誰か学ばずして可ならんや。夫の道に迷い飢餓に陥り、家を破り身を喪うの徒の如きは、畢竟不学よりしてかかる過を生ずるなり。従来学校の設ありてより、年を経ること久しと言へども、或は其の道を得ざるよりして其人方向を誤り、学問は士人以上の事とし、農工商及び婦女子に至つては、之を度外に置き、学問の何たるかを弁ぜず、又士人以上の稀に学ぶもの、動もすれば国家の為にすと唱へ、身を立つるの基たるを知らずして或は、詞章記誦の未に走り、空離虚談の徒におちいり、其の論高尚に似たりと雖も、之を身に行い事に施すこと能わざるもの少からず、是即ち沿襲の習弊にして文明晋からず、才芸の長ぜずして、貧乏破産喪家の徒多きゆえんなり。是故に人たるものは、

学ばずんばあるべからず。之学ぶによりしく其の旨を誤るべからず。

之によつて、今般文部省に於て、学制を定め追々教則をも改正して布告に及ぶべきにつき、自今以後一般人民（華士族農工商及び婦女子）必ず邑に不学の戸なく、家に不学の人なからしめん事を期す。

人の父兄たるもの、宜しくこの意を体認し、其の愛育の情を厚くし、其の子弟をして、必ず学に従事せしめざるべからざるものなり。高上の学に至つては、其の人の才能に委すといへども、初童の子弟は、男女の別なく小学に従事せしめざるものは、其の父兄の越度たるべき事、但し従来沿襲の弊、学問は士人以上の事とし、国家の為にすと唱うるを以て、学費及び其の衣食の用に至るまで多く官に依頼し、之を給するに非ざれば学ばざる事と思ひ一生を自棄するもの少なからず。是皆惑へるの甚だしきものなり。自今以後、此等の弊を改め、一般の人民他事をなげうち、自ら奮つて必ず学に従事せしむべきよう心得うべき事」

この大方針がそのまま学校の方針で、この趣旨は、漸次当事者の奨めと併せて、父兄の向学の念を動かし、就学は年々増加の一途を辿つた。然し国家の方針が一般国民に徹底す



るまでは容易な業ではなかったようだ。

志木学校の創設 宝幢寺学校

明治七年七月 志木小学校は当町宝幢寺を仮校舎として創立。第一学区第四番中学区第一九五番小学志木学校と称す。初代校長 中川喜一郎氏着任 在職 八ヶ月

埼玉県新座郡志木小学校は明治七年七月本町宝幢寺を仮校舎に充つ。爾来学制の変遷に伴い其の名称を異にせり、即ち明治十五年学区の改正により第一学区となり、全十七年学区の名称は廃止せられ、単に志木小学校と称し、全十九年九月志木尋常小学校と改め、全三十五年四月高等科を併置し、志木尋常高等小学校と改称す。

当時高等科は、本町長勝院を以て仮校舎に充てたりしが、明治三十六年一月新校舎落成せるを以て全年二月十一日全部之に移る。

明治七年七月 館村引又町合併「志木宿」となる。

開校当時 志木宿の誕生を見たばかり、政治の基礎も財政の基礎も至って貧弱、到底新校舎の建設は夢のようであった。当時志木宿の戸長（当時は町村長を、戸長と称す）は高野啓三郎氏（高野武兵衛氏の父）であったが、全国的に維新の混乱期で、財政は極度に窮乏

していた。

政府は太政官布告にもある通り、国の財政に頼るな「教育は各自自治体で賄え」といった布告の通り、従って何れの町村でも、寺院か農家の大きな物置とか、神社の社務所とかを仮校舎として其の場を切り抜けた。町当局の苦勞が偲ばれる。

「志木宿」が「志木町」と改称されたのは明治二十二年、大日本帝国憲法が發布され、立憲君主国となったのである。

新校舎時代

明治三十四年五月八日 大熊実三郎校長転任

第五代 小沼佐吉校長着任 大正十三年三月卅一日まで在職 二十二年十一月

明治三十四年七月学校敷地を現在地に定む 坪数一二七二坪（四一八九㎡）

全年七月廿五日 新築校舎認可

明治三十五年三月二十二日 新築校舎 起工

全年三月高等科併設 長勝院を仮校舎に充つ



明治四十四年度卒業写真（新校舎の前で）



志木尋常高等小学校と改称

小沼佐吉は、宝幢寺仮校舎にて不自由な教育活動を続けた最後の校長で、埼玉師範卒業の有能校長として（当時は師範出の教員は稀であった）非常に尊敬されていた。

着任早々新校舎の計画を立て、町当局と協議。敷地の選定に、新築校舎の構想など敏腕を振った。幸にも敷地は町の素封家、三上権兵衛氏の畑（現在の敷地の一部）一二七二坪が決定した。三十四年七月新築認可、三十五年三月廿二日起工、三十六年一月二十五日竣工の運びとなった。

この間高等科の併置、児童数の増加に伴い、一時長勝院に高等科を分置し急場をしのいだ。校舎の建築は順調に進捗し、平屋木造瓦葺、凹字型、坪数二二五坪、建築費七千九拾参円二十三銭九厘、当時としては頗ぶるモダンな、模範的な校舎で県下でも稀にみる立派なものだった。

校長の努力は勿論、町当局の協力も絶大なもので、町民はもとより学校当局並に児童のよろこびは大きかった。明治三十六年一月に新築校舎落成、二月十一日に全部（宝幢寺、長勝院）ここに移動した。

中宗岡の歴史を訪ねて

去る五月十五日、「志木のまち案内人の会」の主催で、「宗岡・水と暮らす知恵」が開催され、志木市役所前をスタートして、天神社↓北美↓宗岡浄水場↓せせらぎの小径↓実蔵院↓泣き虫稲荷↓郷土資料館↓一里塚跡↓野火止用水↓水塚↓産財氷川神社のコースで、案内人の会（会長、一ノ倉達也）のベテラン・メンバーが親しく案内した。



「泣き虫稲荷」のいわれを説明するのは細田和子さん



志木市の浄水場を案内するのは若尾勉さん



「産財氷川神社」の縁起や歴史を説明する深瀬克さん



実蔵院の縁起を語って案内する安藤茂延さん

コースの最後になった産財氷川神社（中ノ氷川神社）（中宗岡2-29）は、荒川土手を背景として行んでいる。志木市指定文化財（平成八年）で、中宗岡に所在する白眉の文化財なので、その説明に耳を傾けてみよう。



「産財」の由来

「産財」地区にあるので中ノ氷川神社は産財氷川神社と呼ばれている。明治時代の宗岡の地図に「産財甲」・「産財乙」・「中三在」・「下三在（産財）」の字名があつて、「三在」には、自分が住む地区から離れた辺鄙な周辺部にある耕地を指す意味があるらしく、「三在」が「産財」に転化したのではないかと推測される。なお「在」は、中心部からはなれた周辺部を指す意味もある。

永享年間（1429～1441）のころ、武蔵国一ノ宮氷川神社（現・さいたま市）から分祀したと伝えられ、拝殿の奥に、覆われた本殿がある。これは、明治二年（1869）に着工、同十四年に完成したといわれ、本殿石積み基壇部には「明治十二年十一月建之当村石工大嶋信正」と書かれている。

ご祭神は須佐之男尊すさのおのみこと、奇稻田姫命くしいなだひめのみこと、大己貴命おおなむちのみこと。本殿は造りで、建築資材はケヤキ。本殿の縁を支える「腰組」には禅宗建築の手法がみられ、向拝の階段の下にある床、「浜縁」は賑やかな構成になっている。さらに、登り龍・下り龍、鯉の滝登り、コノハナサクヤヒメなど多くの彫刻があり、意匠的にも優れた貴重な建造物で、平成八年に「志木市指定文化財」となった。

最近、氏子たちによつて、拝殿の前面縁側部分が修復され、夏祭りでは悪魔払いと無病息災を願ひ、神輿の渡御が盛大に行われる。（中組の祭り）

産財氷川神社の右側に隣接する御嶽山は、明治二十五年（1892）宗岡村のによつて築造された。高さ4m、頂上に「御嶽山大神」・「八海山大神」・「三笠山大神」の三神を祀つてあり、中腹には、木曾御嶽山を模した霊場・神社・記念碑・寄進者連名碑などが林立している。

一山講を起こした井原一山は、与野の人で、荒行を木曾御嶽山で積み、江戸と与野の御嶽大神を勧請して、数万の信者を集めたという。嘉永五年（1852）没。

文政元年（1818）宗岡村に生まれた小日



多くの彫刻が残されている
産財氷川神社本殿



ケヤキ造り

向録之助は病弱だったが、一山の教えを受け、天保十三年（1842）季節はずれの富士登山に成功し、その後も三十数回富士山に登拜、行者としての修行も深め「知足行者」と呼ばれた。

師一山が臨終の際『我が行法を継ぐ者は汝なり』と遺言したことによってますます信望を集めた知足行者は、遠近各地にその名を知られた。明治十五年（1882）64歳で没。その死を惜しんだ一山講の人々は、十三回忌に当たる明治二十八年、「知足行者の碑」を建立した。



「知足行者の碑」

「スマートフォン」はもつと高性能に！



通信大手のNTTは、LTE（ロング・ターム・エボリューション）のサービスをすでに開始しているが、これに対応した「スマートフォン」（多機能携帯電話）を今年中に発売することを発表した。

新たな携帯電話の通信規格として、国際電気通信連合によって第四世代4G（4th Generation）と呼称することを認可されたLTEは、高速・大容量・低遅延を特徴とする。この規格は、NTTドコモがSuper 3Gという名称で、そのコンセプトを最初に提唱したものであるが、同社は5Gbpsのパケット信号伝送に成功して「Super 3G」と呼び、また国際的には、第3・9世代携帯電話（3.9G）と呼ばれていた。いまや国際標準化され、世界中の通信事業者によって導入される見込みとなったのである。

NTTのサービスブランドは「Xi」（クロッシィ）で、「X」は「人、物、情報のつながり」や「無限の可能性」を意味し、「i」は「イノベーション」や「私」を意味しており、

さまざまな人、物、情報が有機的につながり、新たなイノベーションを引き起こしていくことを表現しているという。

ただし、現在の通信業界は、無線LANで携帯電話ブロードバンドを補完しつつ、3G技術の寿命を延ばそうという状況にある。そのためLTEの商業的なサービスを今年末までに開始するのは、六ヶ国、30社未満にとどまりそうだと予想する向きもある。わが国の大手通信業者のKDD、ソフトバンクのLTEサービスへの対応も流動的である。

SIMロック解除の動き

NTTドコモは、今後出荷する携帯端末に、「SIMロック」を解除できる機能を盛り込む方針を明らかにした。

SIMカードと呼ばれるICカードに携帯電話会社がロックをかける状態のことである。SIMカードは、携帯電話会社が発行し、電話番号などの契約者情報を記録したもので、これをロックすることによって、携帯電話会社には「困り込み」、ユーザーには携帯電話機の無料というメリットがもたらされていたが、世界標準とかけ離れた日本独自の制度であったため、問題となっていた。問題点が無くなった訳ではないが、一歩前進というべきか。

いうべきか。

スマートフォンとタブレットは相互に歩み寄り

2007年1月に発表されたアップル社のiPhoneから始まったスマートフォンは、その二年後にはタブレットのiPadへと展開された。携帯電話は多機能となる一方、パーソナル・コンピュータは、タブレット、電子書籍へと変身しながら、性能と機能は相互に接近しつつ、ユーザーに賢い選択を求めている。

街頭無線LANの大幅な拡大計画も

通信各社は、スマートフォンの普及に対応して、外出先でも無線LANが使えるサービスを拡大する計画のようだ。

東日本の大震災では、携帯電話がつながり難くなったが、無線LANで通信ができた例があり、携帯電話の回線網だけでは、混み合って通信速度が下がりやすかった。携帯でデータ通信する利用者も増大しているので、このサービスは歓迎されるに違いない。

クラウド・コンピューティングの夜明け

アップルのCEOのステイブ・ジョブズは、音楽データ、電子書籍、写真のデータなどを一括して管理するサービスを今秋から開始すると発表した。十年前には、PCがすべての生活の中心になると考えていたが、それは崩れた、と彼は告白している。

すでに多くのIT企業が参入しているが、今後データとアプリケーションをネット上におき、みんなが共有するようになる。

PCは、ハードディスクなどを欠いた、端末デバイスへと向かうことになるろう。

特定非営利活動法人

NPO「市民フォーラム」

この法人は地域住民と行政に対して取材活動を行ない、報道によって市民の公共参加を推進します。また市民間のコミュニケーションの増進に努めます。

地域情報紙「市民プレス」はNPO市民フォーラムが編集・発行し、無料で配布しています。

読者の「オビニオン」(意見・感想)をお寄せ下さい。

TEL090 (3048) 5502

編集部 原宛にどうぞ

INFORMATION

NPO市民フォーラムが編集する
CREATIVEBOOK 新書判
好評発売中！

新書判240ページ・フルカラー
定価 1260円（税込）
全国書店で発売中
ネットでも購入できます。

発行：(株) ヒューマン・クリエイティブ
発売：揺籃社
電話：042-620-2616



CREATIVEBOOK 10号 「隅田川を遡る」 橋梁物語

空撮写真のほか多彩なカラー写真を添えて隅田川に架かる橋梁と兩岸の賑わいを訪ね、江戸時代からの歴史を語る。



CREATIVEBOOK 11号 「山手線は廻る」 環状鉄道の誕生

新橋から品川・横浜へ、日本の鉄道建設は明治五年に始まった。半世紀を経て完成した環状の「山手線」は、首都東京の大動脈となる。本書は山手線各駅近傍の地誌を語り、歴史的な変遷を偲びつつ、気ままに読み下せるように編集された物語り。